

五 わたがし雲

秋です。空には、いっぱいいわし雲がうかんでいます。

高い青い空にちりばめられた白いわし雲は、とてもきれいで、見ていて気持ちいいのですが、タツくんは、なんでいわし雲って言うんだろうと思ってしまいます。

タツくんは、いわしがきらいです。お母さんが晩ごはんのときに、ときどき焼いてくれるいわしは、苦くて小さな骨があって、とても食べにくいのです。

お父さんは、お酒を飲みながら「やっぱり、いわしがいちばんだなあ」なんて言ってますが、タツくんは、さんまのほうが好きです。だから、いわし雲じゃなくて、さんま雲ならいいのになあと思います。

ある日のことです。タツくんは、お父さんとお母さんといっしょに縁日に出かけました。今日もいい天気で、空には、やっぱりいわし雲がうかんでいます。

すると、どこからかわたがしのあまいにおいがしてきました。割りばしをクルクルとまわしながら、わたがしを作っているおじさんのまわりに、子どもたちが集まっています。

タツくんも、順番をまってわたがしを買ってもらいました。あまくてフワフワのわたがしをなめながら空を見上げると、いわし雲の下にいくつものわた雲が流れていきます。それを見て、タツくんは思いました。

(いわし雲より、さんま雲より、わたがし雲がいいや)

「タツくん、わたがしおいしい?」

お母さんがたずねました。

「うん。でも、わたがしじゃなくてわたがし雲だよ」

タツくんが答えると、お父さんもお母さんも「？」という顔をしました。

あまいあまいわたがし雲。タツくんは、お母さんにもわたがし雲をなめさせてあげながら、
にっこりと笑ったのでした。

「お母さん、わたがし雲、おいしいね！」